

千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2012-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉原, 荘介, 戸沢, 充則, 大塚, 初重, 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13410

千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器

杉原 莊介・戸沢 充則
大塚 初重・小林 三郎

一、はじめに

昭和三十八年も終りに近い頃、わが考古学研究室は、千葉県佐倉市の北部で、南関東地方における中期初頭―この地方では最古―の弥生時代の墓址群を発見した。これは、われわれが長い間探求してきたものであり、ことにその内容の豊富さにおいて、われわれの喜びは大きかった。この遺跡に対して研究室では、昭和三十八年十二月二十二日―二十八日、および昭和三十九年一月十六日―二十四日までと、二回にわたる本調査を行って、ほぼ所期の目的を達したのである。

そして、われわれはこの墓址群を目標として発掘をつづけたのであるが、その地域はまた縄文時代の後期から晩期へかけての遺物包含地であった。しかも、われわれの発掘地区からは、かなりの量の遺物を採集することができた。附近には縄文時代の後・晩期に属す小貝塚が二箇所あり、このことはまったく予測されないことではなかったが、その中には今研究を続けている諸型式の土器などがある、われわれの興味をそそるものも多かった。弥生時代に属する墓址群については、すでに簡単な報告（日本考古学協会第三〇回総会研究発表要旨「千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓址」）も行ったし、また正報告書の刊行も計画している。その際は、はんさを避けて、縄文時代に関



第1図 天神前遺跡附近地形図

する遺跡・遺物については触れなかったし、また将来もこれをなるべく除外する方針である。しかし、これらの資料としての価値は、きわめて高いし、ことに最近ふたび盛んになりつつある南関東地方の晩期縄文式土器の研究にかならず資するところがあると思ひ、本誌の貴重な誌面の一部をいただいで、これを発表させていただいたわけである。

また、ここに紹介した晩期縄文式土器の中、その最終末の型式のものに至っては、本遺跡の弥生式土器とも、そろそろ関連をもってくる時期に達しており、このことについてはもはや問題とせねばならない時機に至っているとしてよいであろう。このことについても、この資料が前もって発表されていると、本報告の場合も非常に都合がよいと考えたためでもある。

早急に用意した報告のため、理論の推敲などにやや不充分のところがあるかもしれないが、資料自体は必ず益するところあるを信じ、あえてこれを発表するに至った次第である。

二、遺跡と環境

天神前遺跡は千葉県佐倉市岩名にあり、俗称天神前とよばれる標高約三〇米余の低い丘陵に存在する。かつて京成

佐倉駅の北側にこの丘陵がせまっていたが、いまでは宅地造成のためけずりとられ、かなりの面積を有する平地となっている。遺跡地点は京成佐倉駅の北方、岩名部落への道を二・五軒の距離にあり、村社天神宮の東側一帯である。また、山崎部落の北東方五〇〇米で畑地となっているが、遠からず採土工事が進められる運命にある。

遺跡の北方約二軒で印旛沼に達し、丘陵の西側を西北流する鹿島川は、いくつかの小支流を合わせながら流域に水田地帯となっている沖積地を形成しつつ印旛沼へ注いでいる。岩名をはじめ飯田・下根などの諸部落は、この丘陵の周辺山麓に存在し、また浅い谷が丘陵をきざみ谷頭水田をつくり出している。

遺跡は南北二方から浅い谷がせまった数十米の中の狭い平坦な丘陵上に位置しているので、その範囲は南北約五〇米ほどの地域内に限定できる。とくに北側では谷頭が遺跡附近にまで達し、現在その部分は畑地となり、北方へ傾斜が下降すると水田地帯となる。

丘陵の基盤は成田層からなる洪積世の台地で、その上面に関東ローム層とさらに耕作土層が堆積している。発掘調査によりえられた考古学資料はすべて耕作土層内から発見されたものである。したがって、縄文時代における生活面はこの黒褐色土層中であつたことは間違いないであろう。

既述のごとく本遺跡の立地する地形上の性格からみると、遺跡西方の丘陵下には鹿島川とその流域の沖積地が展開し、西北方から北方にかけては印旛沼と沿岸低地が形成され、丘陵上が縄文時代人の生活領域とされていた時代には、沖積地の形成は現今の状態にまで進んでいなかったであろうことは、容易に考察されるところである。天神前遺跡が立地する同じ丘陵の北側斜面には、縄文時代後期に中心をおく小貝塚がみとめられているので、当時は印旛沼の沿岸は今日より以上に丘陵に接近していたものと思われる。かかる考察が正しいものであるならば、浅くきざまれた谷の下方の一帯は、沼かあるいは沼沢地となつていて、本遺跡を残した人達の生活圏として非常に密接な関係のあつた地域としてよいであろう。

低い丘陵とそれを侵蝕した入りくんだ小支谷の存在は、縄文時代の遺跡としての一般的な傾向を具えており、彼等の狩猟・漁撈を中心とした生活を支える恰好の地であつたといふべきであろう。

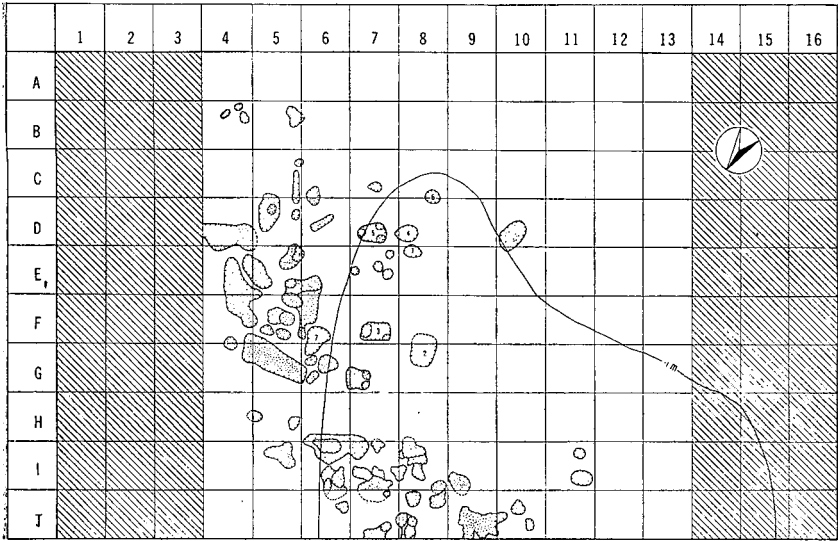
三、土 器

土器の包含状態

天神前遺跡における縄文時代遺物は、その遺存状態が極めて不安定なものであった。

すなわち、われわれの今回の発掘地点は、その中心部分が弥生時代の墓址群であり、そのためピットを掘るさいに、弥生時代にすでに縄文時代の包含層が攪乱を受けたことは十分に考えられるところである。事実、弥生時代のピットが発見された部分、およびその周辺では、安定した腐植土層（黒色土層）の堆積はほとんど認められず、黒色土にブロック状のロームがまざりこんで、全体として褐色土といえるような性状の土層を呈していた。いくつかの型式にわたる縄文式土器は、そうした攪乱された土層中に雑然と遺存していた。

縄文式土器を包含する土層の厚さ（ローム層上面までの深さ）は、発掘地点の東側半分（4〜9列の発掘区）では三十種前後を越えることはなく、純粹に腐植土といえる黒色土は、ローム層に三〇〜八〇種位の深さで不規則な形に掘りくぼめられた、多数のピットの中を埋める状態だけで存在した（第二図参照）。このピットの中には、大部分のものに貝殻・獣骨などが多少にかかわらず入っていた。そ



第2図 発掘区とピット群

して出土する土器はすべて縄文式土器であったが、ピット毎に型式が単一であるというのではなく、堀の内Ⅰ式を最古とする後晩期の諸型式、とくに後期の縄文式土器が大半を占めていた。それらの土器はおしなべて保存状態が不良である。性格の明らかでない多数のピットの生成と関連させて考慮すべき事実であろう。

発掘地点の西側半分、とくに11・12・13列の各発掘区では、六〇糎（北側）から一〇〇糎（南側）に及ぶかなり深い包含層の堆積が認められた。遺物の包含量が比較的多かったJの11・12・13区附近では、黒褐色の耕作土二〇糎、黒色土二五糎、褐色土（部分的にロームのブロックを含む）三〇糎という層序が認められた。そして褐色土層中からは堀の内式・加曾利B式などを主とする後期の土器が、また黒色土層中からは主として晩期の土器が出土するという傾向が観察されたが、問題の複雑な縄文後晩期の土器型式の検討に役立つようなそれ以上の結果は得られなかった。要するに、天神前遺跡の縄文式土器は、その中に非常に興味のある資料を含みながら、その遺存状態の上で、一つの制約を負わされた資料であることを、分類と説明にさきだって記録しておく。

土器の分類

天神前遺跡から発掘された縄文式土器の量は、セメント袋で約二〇ばい分に相当し、かなり多い。そのうち約三分の一は型式の判定のつかない無文あるいは細かな破片であり、他の三分の一は堀の内式・加曾利B式を主に、わずかに安行Ⅰ式などを含む後期の縄文式土器であった。以上の土器については記述を省略し、このレポートでは、安行Ⅱ式といわれる土器以下、主として晩期の縄文式土器について、その内容と若干の問題を明らかにしようと思う。

A 1類（第三図 1～19）

隆起帯状縄文とその間を結ぶ特徴的な小突起を文様の主調とする一群の土器。大きな扇状突起ないしはそれに類した口縁裝飾をもつ波状口縁の深鉢形土器（1～4等）、同じような裝飾をもつ平縁の土器（5～11等）がある。器面は光沢をもち一般に焼成もよい。従来、安行Ⅱ式土器のうち帯縄文土器として一括されてきたものに等しい。

A 2類（第三図 20・21）

いわゆる杵状の構成をもつ磨消縄文帯と、低平な突起を文様にもつ平縁の土器。文様の基本はA 1類に類似するがその表現は型式論的にみて便化していると観察される。鈴木公雄氏などによる姥山Ⅱ式の(b)とされたものに等しい。



第3図 A 1・2・3・4・5 類土器



第4图 A 6·B 4·5·6·7·8 類土器

A 3 類 (第三圖 33・34)

口縁がやや内傾する鉢形土器、A 2 類の杵状文が一層便化されたような構図の磨消縄文をもつ。

A 4 類 (第三圖 22、29・37・39)

三叉状文が独立的に顕著に認められるものや、弧状の沈線にかこまれた磨消縄文の文様に特徴のある土器などが含まれる。もちろんそうした両方の文様が一つの土器に施されることもむしろ多い。26・28・29等にある突起は、いまままで安行Ⅲ a 式といわれたものの、小形浅鉢形土器などの胴部屈曲部によくみられる装飾であろう。全体としてこの類に含まれる土器の器形は、やや特異な例に属するものが多い。

A 5 類 (第三圖 31・32・35・36)

口縁部がくの字形に外反する大形の浅鉢形土器と思われる。口縁に並行する磨消縄文帯がある。胴部以下の文様は明らかでないが、磨消縄文を主調とする帯状文や弧状文、それに三叉状文などがあるらしい。31・32・35の口唇部につけられた小突起は特徴的。姥山Ⅱ式の(c)または(d)とされたものに近いが、われわれの資料では茨城県立木貝塚で、やや古い型式に伴うらしい資料を得ている。

A 6 類 (第四圖 40、50)

口唇直下と上胴部に縄文帯をめぐらし、その中間にあたる口縁部に、弧状入組文や円形文、さらに菱形、三角形などに区劃された磨消縄文による特徴的な文様を配する土器。多くは大きな波状口縁をもつ深鉢形土器であるが、45・46のように平縁の浅鉢と思われる土器もある。この類の土器は、姥山Ⅱ式とか膝子式などといわれる型式の、最も特徴的な部分を占めるものであろう。

A 7 類 (第六圖 115、147)

天神前遺跡の晩期縄文式土器のうちで、最もまとまった出土例のある資料。われわれが杉田、桂台遺跡で杉田B類として分類し、広く前浦式土器として知られているものとはほとんど等しい。表面の文様はすべて太い沈線でかこまれた磨消縄文。用いられた縄文は一般に粗大であって、原体が大部分LRである点は特徴的である。文様の構図は大柄で、雲形文とかㄆ字状といったような単位文様要素はつかみにくい。ただ、多くの資料にみられるのの字形の

意匠は、この類の土器にいちじるしい特徴といえる。なかに数片捺糸文を施したものの(145~147)があらたに注意された。

器形は口縁が顕著に内傾するもの(115~117)外反するもの(140~143)と、ほとんど直口のもの等があるが、全体として明らかに深鉢形と推定される土器は顕著でない。口縁はほとんど平らで、特徴的な二個一対の小突起をもつ例が多く、口縁内側に沈線をめぐらすものも器形によっては一般的である。なかには突起の部分に入組文風の文様を描くもの(114・140等)もある。台付土器の台にあたる資料も検出された。

B 1類 (第五図 83~93)

口縁直下に紐線ないしはそれに類似した文様をもつ粗製深鉢形(甕形)の土器。紐線が並行して二本の場合や、89のように二本の間を縦につなぐ例もある。紐線の直下、口縁部に集約して、沈線による簡単な構図の文様を配するものが多い。器面の大部分には粗い条線が規則的につけられている。

B 2類 (第五図 94~99)

口縁がわずかに内傾し、口縁端の断面が内側にふくらむような形状をもつ深鉢形土器。口縁部にやや規則的に横走る条線以外に文様らしいものはない。全く無文のものもかなり多い。

B 3類 (第五図 102~114)

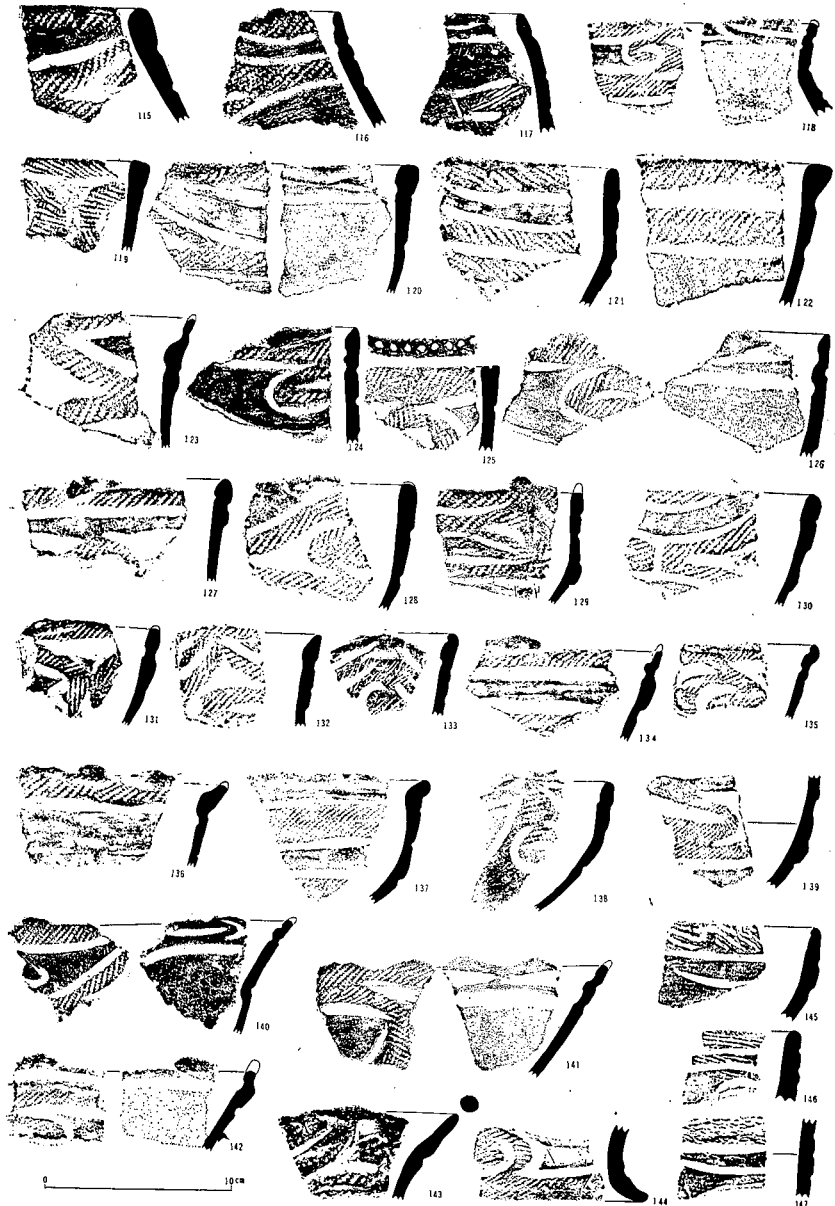
B群として一括した資料の中でその存在が最も顕著な粗製の深鉢形土器。口縁がいちじるしく内傾するものが多い。口縁に接して、太い沈線で描かれた二段の杵状文のめぐる文様が特徴的である。113のように口縁部以下に粗い条線のひかれるものも多いらしい。この類の土器はいわゆる姥山Ⅲ式の主体的な粗製土器としてとりあげられたものに相当する。

B 4類 (第四図 51~54)

A 6類の土器から縄文をぬいた文様をもつ土器。器形も焼成等もほとんど区別するところはない。鈴木氏等の姥山Ⅲ式のメルクマールとなるものであるが、天神前遺跡では類例がとほしく、とくにB 3類にくらべて極端に検出例の少ないのが注意される。



第5図 B 1・2・3類



第6图 A 7 類土器

B 5 類 (第四図 56 ~ 61)

土質・焼成ともに非常によい。小形の深鉢形土器。直線や弧線がかこまれた区劃の一部を繊細な集合沈線(60のよう)に羽状のものも多い)で埋め、他の部分を研磨して磨消縄文と同じ効果をあらわしている。56・58のように口唇上辺に刻目を入れた部分を一定間隔(おそらく口縁を四〇五等分する位置)において口縁裝飾としたものがあり、同じような連続する短線を器面の文様として施したもの(56・59・60)もある。それらはいわゆる安行Ⅱ式に特有な突起をつける手法に似たところがある。発見された資料は図示したものがほとんどすべてである。

B 6 類 (第四図 62 ~ 66)

沈線とその間を埋める突刺文(列点文)を特徴とする一群。65の口唇には特徴的な小突起がある。

B 7 類 (第四図 67 ~ 70)

67は表面全く無文の浅鉢形土器。裏面には口唇の突起からつづく粘土紐貼付の低い隆帯があつて、その上に点列がつけられている。その文様自体はB 6 類に近い。68は連続する弧線を上下に入組ませた文様をもつ浅鉢形土器。69・70では口縁部に向つて弧を描く沈線文の間に、特徴的な円弧状の入組文が施される。これらの土器はB 4 ~ B 6 類のいずれかと関係のあるものであろう。

B 8 類 (第四図 71 ~ 82)

杉田遺跡の杉田A類に近い一群。しかし、三又状文の描出が明瞭でない点や、器形が平縁の深鉢(72等)や主として浅鉢に限られ、杉田A類に多かった富士山形の波状口縁の土器がない等、若干のちがひがある。天神前遺跡における出土例はあまり多くない。

K 1 類 (第七図 148 ~ 151)

亀ヶ岡系土器の前半の型式に属すると思われるもの。土質・焼成ともA・B各類に属するいわゆる安行系の土器よりも一般によい。口縁に三又状入組文をもち胴部に細かい縄文を施す浅鉢形土器148は、大洞B式としてよいだろう。他の三例は型式認定がむずかしいが、150は大洞C 1式に近い。検出例は図示したものがすべてである。

K 2 類 (第七図 152 ~ 166)

関東地方の例では杉田C類(杉田II)に分類されたものと全く等しい。161のような壺あるいは他の深い器形になると観察できるような資料もあるが、大部分は大形の浅鉢形土器であるという事情も、杉田遺跡でのあり方と類似する。出土例はかなり多く、図示した資料の三倍近くある。

K 3類(第七図 167~174)

工字文または浮線網状文をもつ精良な作りの土器、その特徴は杉田D類・姥山V式・荒海二類a種など、関東一円の大洞A式比定の土器とほとんど等しい。174は口縁に平行沈線をめぐらす半精製の鉢形土器である。

K 4類(第七図 175~186・第九図)

K 3類の文様が沈線化したような文様(175・176・180等)や、それらが便化した菱形文(第九図等)・綾杉状の沈線文(186)等の文様によって特色づけられる一群。地文に縄文をもつもの(175・176・180・183等)と、条痕あるいは櫛目状擦痕(177・181・182等)がある。胴部以下にも同じような条痕や擦痕をもつもの(第九図)が多いらしいが、186のように網目状の燃系文をもつものもみられた。器形を正確に復原できる資料は少ないが、175・180・182等のように、壺に近い形態と思われるものもある。しかし186や第九図例のような胴部の張る深鉢形土器がいちじるしい。この類の土器は荒海遺跡の第二类c・d種、すなわち荒海式に属する。

K' 1類(第八図 228~230)

複合口縁をもつ無文の大形浅鉢ないしは鉢形土器。その形態と特徴は杉田遺跡でC類に伴出したものと一致する。

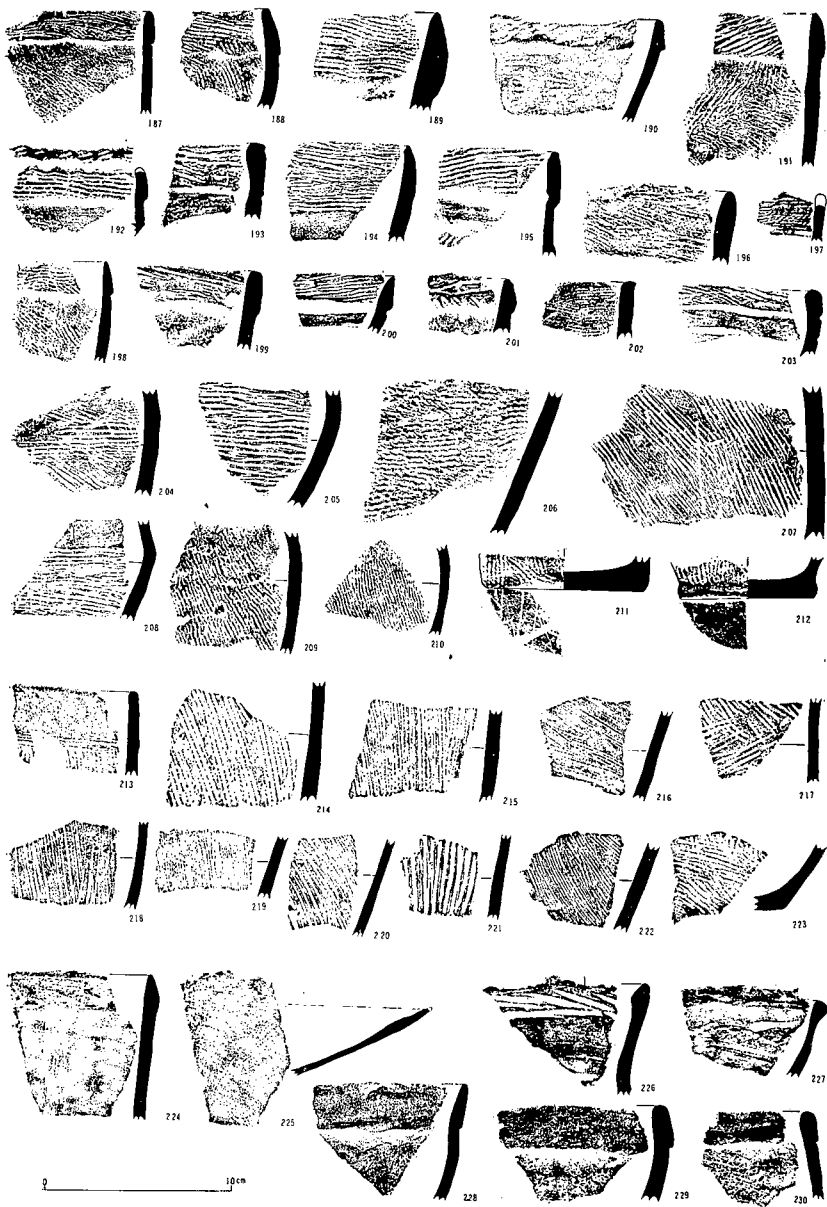
K' 2類(第八図 187~212)

燃系文を有する粗製の深鉢形土器を一括した。出土量は条痕や擦痕のあるK' 3類の四倍程度で、その存在は顕著である。口縁部破片では半数以上のものが肥厚した折り返し口縁をなし、他に沈線で無文部と境するもの(193・199・200・203)や、凹凸のないもの(194)などもみられる。折返し口縁をもつものでは、横走する燃系文を施す口縁部の直下から、斜行して密接に燃系文をもつものが多いが、無文部を残すものも少なくない。この両者には器形にも若干のちがいがあって、無文部を残すものは頸部から胴部にかけて屈曲がみられる。208はその屈曲部の破片。

胴部破片において燃系文が横走するものと、斜行ないしは縦位に近いものの比率はほぼ半数ずつである。横走する



第7圖 K 1・2・3・4 類土器



第8图 K' 1·2·3 類土器

ものの中には原体の撚りの逆な例(206)もあるし、一般に大きさもちがうので、型式の違うものである可能性が強い。口縁破部片の断面形のちがい(187・188・191・198等と189・194・195・199・203等)も型式のちがいとして理解されよう。

K'3類(第八図 213~223)

櫛状器具によると思われる擦痕(213・215・216・218・222)や貝殻条痕(214・217・220・223)をもつ資料。口縁部破片一片に対して、胴部以下の破片が圧倒的に多いという現象は、この中にK4類などの胴部以下の破片をかなり含んでいることを意味する。したがって、K'3類のような土器が天神前遺跡で粗製土器の主流になるような型式はないということであろう。しかし、213と極めて類似したものは、荒海式に伴う粗製土器(第二類e種)の中に認められる。その他の破片についてはその主体的なあり方は明瞭を欠く。

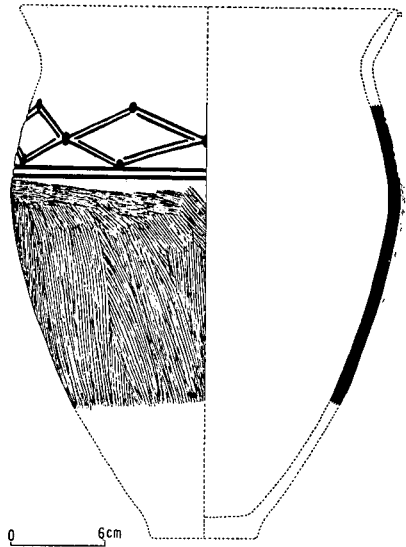
分類のまとめ

われわれは天神前遺跡の縄文晩期を中心とした土器群を、文様に縄文を伴ういわゆる安行式系の土器(A系列)・縄文を欠く安行式系の土器(B系列)・いわゆる亀ヶ岡式系の土器(K系列)・亀ヶ岡式系の土器に伴うと考えられる粗製の土器(K'系列)という、ごくおおまかな四つの系列にわけて、その中で文様の特徴を主な基準とする細分をおこなった。分類のまとめとして、まず各系列内部の型式論的な関係を考えてみよう。

A系列の土器について

七つに分類されたA系列の土器のうち、量的にもまとまった出土資料があり、他遺跡との関連においても特徴的にとらえられるものは、A1類・A6類・A7類の三つのグループである。これは現在学界で知られている表現になおせば、安行Ⅱ式・姥山Ⅱ式・杉田B類(前浦式)の中の最も代表的な土器といえることができる。これら三つの土器群は相互に型式論的な推移をたどることができる。

まず安行Ⅱ式と姥山Ⅱ式の関係については、鈴木氏の詳細な分析が行われていて、その両者が型式的に連続する可能性が強いという見解に、われわれも従おうと思う。そしてその両者の間にいわゆる安行Ⅲa式という型式が存在するか否かという、重要でかつ複雑な課題があるが、われわれは現在ひきつづいて検討中の茨城県立木・千葉県犢橋両貝塚などの資料によって十分論じたいと思う。見通しとしては、三叉状文を特徴とするいわゆる安行Ⅲa式なる一群



第9図 K4類土器復元実測図

の土器は、安行Ⅱ式やそれ以降の型式のバラエティとして理解されるものと考えている。そしておそらく、姥山Ⅱ式やそれ以後の安行系の土器にいちじるしい円弧状の入組文などは、三叉状文の二次的な（または関東的な）発展の姿として理解できるにちがいない。

つぎにA6類とA7類の関係、すなわち、姥山Ⅱ式と杉田B類（前浦式）の関係を、型式論的につながるものとしてとらえようとした積極的な意見はいまのところない。われわれは杉田・桂台遺跡における資料の観察にもとづいて、いわゆる前浦式土器が大洞C2式土器の関東的な変化の姿であるという考えを否定し、むしろ安行式の伝統をもった土器である可能性が強いことを指摘しておいた。天神前遺跡のA7類の資料を、とくに時間的に先行するA6類（姥山Ⅱ式）との関係において観察した結果、われわれの予測は、まだに訂正する必要があるという自信を若干深めることができた。その理由は、両者に共通して多い文様の構図が、弧状入組文（の字状の文様）であること、縄文原体の撚りがA6類・A7類の両者では大勢において共通であり（LR）、対照的にそれ以前のものとは逆である（RL）こと、さらに口縁部の断面形状や口唇部の小突起も、晩期に属する安行系土器の一般的な特徴として理解する方が自然であることなどである。姥山Ⅱ式の分布と前浦式の分布がほぼ一致するらしい点も裏づけとなろう。以上のような事実をよりどころにして、A6類とA7類の型式上のつながりを、やや積極的に主張しようと思う。そして一型式として独立するかどうかはまだ問題があるとしても、両者の中間的な様相をもつものが、堀の内貝塚B地点の材料によって、われわれの間で検討中であることもつけ加えておきたい。なお、A6類からA7類への変遷を追う場合、杉田・桂台遺跡の研究に対して与えられた批判にも関連する形態論上の一つの問題がある。その点に関してはまとめて後述するつもりである。

Aの系列に分類したものの中には、右のような特徴のはっきりした三群の土器のほかに、A2類からA5類に分類された四つのグループの土器がある。おそらくA1類またはA6類のいずれかに、一型式内の組成としてふくまれるものと考えられるが、天神前遺跡ではこれを正確に位置づけることはむずかしい。鈴木氏の見解にしたがうなら、いずれも姥山Ⅱ式のバラエティとしてA6類にふくまれることになるが、われわれがもつより適当な資料によって、今後なるべく早く検討をすませたいと思っている。

B系列の土器について

B1・2・3類はそれぞれ個性的な特徴をもつが、形態の上ではいずれも口縁が内傾する安行式特有の粗製深鉢形土器として、型式論的に処理しやすい。

ところがB4類からB8類にいたる五つのグループの土器は性格を異にする。それらのうち特徴の明らかなのはB4類とB8類でその間の推移はA6類からA7類への変遷と相応する関係にある。その両者の中間的なものとしてB5・6・7類のなかのあるものがあてられると思われるが、天神前遺跡のわずかな資料で、あえてそれらを抽出する必要はないだろう。

そのことよりも、B4類からB8類までの土器が、安行式の伝統の中では本来縄文を用いて飾られるべき形態であったものが、この段階で縄文をもたないものに変化したという現象に注目したいと思う。この点についてはA6類からA7類への変化の問題と関連して後述する。

KおよびK'系列の土器について

K系列の土器がK1類以下記述の順序に編年されるものであることは明らかである。その中で、晩期前半の資料(K1類)がその存在すら明瞭を欠くのに対して、晩期後半にあたるK2類(大洞C2式)以降の型式がいちじるしい存在を示すという点は、関東地方一般の傾向として、この天神前遺跡でも一例を加えたことになる。

これら後半の諸型式には安行式の系統にない粗製土器が共伴する。このうちK3類には折返し口縁をもつ撚糸文土器の大部分が伴うと思われるが、この点は西関東に位置する杉田D類(杉田Ⅲ)などと対比して、東関東的な特徴として記憶されるべき事例である。またK4類に伴うとみられる粗製土器は撚糸文のものでも、擦痕・条痕をもつもの

でも胴部の折れる形態をなすものが多いと考えられるが、これは貝殻条痕をもつ土器の存在と同時に、東日本的な要素でないことは改めて指摘するまでもない。

各系列土器間の相互関係

以上の説明ですでに明らかなるように、天神前遺跡の晩期縄文式土器は、各系列間の相応する土器群同志の組合せによって、次のような型式にまとめられる。

天神前Ⅰ—A 1類とB 1類を代表的なグループとするもので、従来のいわゆる安行Ⅱ式に相当する。これにはA 2類からA 5類にいたる土器の一部と、粗製土器としてB 2類もわずかに伴う可能性があることを立木貝塚で観察した。なおその場合K 1類のあるものが共存することもあり得る。

天神前Ⅱ—A 6類とB 3類を主要な組成とし、A 2類やB 2類の一部、それにB 4類も同一型式内におけるパラエティと考えられる。K 1類のうちのあるものが関係するであろう。いわゆる姥山Ⅱ式とⅢ式を含む。

天神前Ⅲ—A 7類とB 8類を特徴的なものとする。特殊な資料としてはK' 2類の一部が伴うらしい。その点を除けばわれわれのいう杉田Ⅰのあり方と等しい。

天神前Ⅳ—K 2類を主体とする。粗製土器としてK' 1類 K' 2類のあるものが伴う。杉田Ⅱ（杉田C類）と一致する。

天神前Ⅴ—K 3類に代表されるもので、捺系文の粗製土器K' 2類の大部分とK' 3類のかなりの部分が伴う。捺系文を有する粗製土器が多いという点では、荒海遺跡や山武姥山遺跡（姥山Ⅴ式）、さらに千網式のあり方と類似し、杉田Ⅲとは異なる。

天神前Ⅵ—K 4類を主体とし、K' 2類とK' 3類の一部が伴う。関東地方における晩期最末期の土器である荒海式や姥山Ⅵ式とほとんど様相は等しいと思われる。

四、その他の遺物

石斧 現存するものは三個。いずれも半欠または刃部を欠いている。磨製石斧二個分と、打製石斧一個がある。

石錘 完存するものは三個ある。いずれも楕円形で、両端を打ち欠いた凹みをもつ扁平なものである。平均長径6.0 cmある。

独鈷石 三個分ある。いずれも破損していて原形をとどめない。うち三個は明瞭に独鈷石として認識できるが、うち一個は棒状の破片で、一見したところ独鈷石か石棒かは決しがたい。二個の明確な独鈷石はA-13、D-11の各区から出土している。

環状石斧 半欠一個がみとめられる。A-13区から独鈷石片と共に出土している。直径14 cm、厚さ2.5 cm、中央に径2.5 cmの円孔が穿たれており、その両面にピッチ状の粘着物がみとめられる。

石棒 石棒の先端部が破片で一個分ある。四面に浅い彫刻がある。直径約5 cmある緑泥片岩製。他に雲母片岩製の一片があるが明確でない。

石鏃 完形品一個。黒耀石製で両面に細かい剝離のみられるもので、無茎で扶込みがある。石皿 破片一個。火成岩で表面の粗な石質を呈する。細片ながら石皿であると推定しうる。

浮子 一個。軽石をすりへらして作られ、断面をレンズ状に、全体を楕円形にまとめている。

敲石・磨石類 合計で十七個分ある。大部分は断片もしくは破片で原形をとどめない。完存する若干の例からみても、形状はきわめて不定形である。石質もまちまちであり、砂岩質のものがやや多いことのみが知られるにすぎない。

土偶 脚部二個分と肩部一個分が出土した。脚部の一つは山形土偶であり、一方はみみづく土偶の系統に入るものと思われる。

滑車形耳飾 破片で総計五片ある。いずれも周縁のみが遺存しており、原形は推定できない。遺存する周縁は幅が2 cm内外で、中央部が若干くぼんでいる。内面はいずれも剝落痕がみとめられる。

土製円盤 全部で五枚の出土をみる。土器片の周囲を打ち欠き。若干すりあげたもので、やや円形に近い形を呈する。大きいもので長径5.5 cmを計る。

用途不明土製品 管状の土製品で、一部分に剝落痕のみられるところから、何かの装飾の一部かとも考えられる。

三角文を重ねた文様にはさまれて平行沈線文が四条描かれている。全長4.2 cmある。

、円盤状土製品 三個分ある。いずれも原形をとどめない。推定するところほぼ円形に近いものである。うち一個は表裏に貫通する二孔がみとめられ、他にあるもののうちには片面に丹の付着するものもみとめられる。推定で径20 cm厚2.2 cmあり、三個ともほぼ共通している。

五、天神前遺跡の晩期縄文式土器についての若干の問題点

われわれは先に杉田・桂台遺跡の報告を果し、それに関する二三の問題を明らかにした。さいわいなことにそれについて少なからぬ批判を受けることができた。ここではそれらのことを含めて、天神前遺跡における晩期縄文式土器を中心とした二三の問題について、予測的な考えを述べてみたいと思う。

縄文のある土器とない土器

天神前遺跡の土器を分類するにあたってわれわれは、縄文のある土器とない土器を意識的に系列化してわけた。帯縄文系土器と紐線文系土器という安行式前半にいちじるしい傾向を、安行式終末期までなんらかの形でおよぼすことができないうかというのが、われわれの最近の仮説である。そのうらづけはいくつかある。一つはいわゆる前浦式として最近になって新らたに注意された一群の土器が、前述のように安行式の伝統をうけつぐ土器であると観察できることであり、さらにそれが杉田・桂台遺跡におけるように、杉田A類（いわゆる安行ⅢC式）と同時期の土器として存在する可能性があるということである。しかしその両者は主体的な分布の中心が多少ずれるらしく、例えば西関東の杉田遺跡では縄文のない杉田A類が主体であり、東関東の天神前遺跡では全く逆であるといったように複雑な問題を含んでいる。また後述する晩期後半という時期的な問題もからまって、鈴木・麻生両氏の批判があるように、形態的な組成の上でも十分に分析し切れない点もある。しかし天神前遺跡の資料の観察でやや明らかになったように、この天神前Ⅲ（杉田Ⅰ）とそれに先行する天神前Ⅱ（姥山Ⅱ・Ⅲ）との関係は型式論的に近い関係にあるし、また再三触れたように、堀の内貝塚B地点の資料はさらにそのつながりを確実にするものと予想している。従来の型式名を借りて表現するならば、堀の内のその資料は「前浦式直前型式」ともいふべきものであり、そしてそれに対応

する“安行ⅢC直前型式”というべきものである。とくに後者については、最近報告された二、三の資料からも明らかのように、関東一円にかなり例は多いはずである。

ところで最近鈴木公雄氏が労作を発表した姥山Ⅱ式のあり方が、姥山Ⅲ式との関係において当面の問題に抵触する。もちろんわれわれ自身正確な資料をもたないので、たんなる見解の相違にすぎないかもしれないが、縄文の有無という点を除いて、ほとんど同じ文様・器形をもつ土器を、型式の差としてとらえるよりは、同一型式内のバラエティとする方が理解の仕方としては自然だと思ふ。この型式分離が最初におこなわれた山武姥山貝塚の報告事実によれば、Ⅱ式とⅢ式は各層位とも混在の形で、常にⅡ式が主、Ⅲ式が従という相対的な比率を示して存在するし、両者の分離に一層有利な材料とされる築地遺跡の資料にしても、その比率は山武姥山貝塚における事実の延長とみられる。天神前遺跡でも同様なのである。特にここでは“姥山Ⅱ式”にくらべて甚しく存在が稀な“姥山Ⅲ式”の精製土器に

“姥山Ⅱ式”に比べて甚しく存在の顕著な“姥山Ⅲ式”の粗製土器が伴うという変則的な傾向さえある。

以上のようなことから、姥山Ⅱ式とⅢ式の分離にはなお多くの問題があるという意見を明らかにしておきたい。そして多くの縄文のある精製土器と縄文を欠くわずかの精製土器に、数種類の粗製土器（遺跡あるいは地域によってこれらの種類と比率に多少の変化がある）が伴うという形、たとえば貧弱な例ではあるが天神前Ⅱのようなあり方が、この時期を劃する一型式として存在するのではないだろうか。しかしその場合、従来の安行Ⅲb式といわれた型式と一致するかどうかはいまのところ明らかではない。

晩期の前半と後半の様相

東北地方では大洞C2式土器をめやすとする前後の時期、関東地方や中部地方でもほぼそれに対応する時期は、全国的にいつて遺跡の立地や遺物の様相に一つの不整合面があるようである。同じことは西日本で潮見浩氏等が注意している。

全国的なこうした大きな動きの中で、関東地方の晩期縄文式土器にあるいくつかの変化を注意することは無意味ではない。その一部については、杉田・桂台遺跡の資料で、いわゆる安行式土器といわれる関東土着の土器が、杉田Ⅰの時期で消滅し、それにかわって杉田Ⅱの時期には東北的な土器（大洞C2式）が主体となるという事実を、とくに

顕著な現象としてとりあげ、さらにその前後の事情についての特殊性をいくつか指摘したことがある。

天神前遺跡でもその傾向は同じであったが、ここではそれに加えてさらに一つの現象を観察しておきたい。それは前項の問題にも関連することであるが、天神前Ⅲ(杉田Ⅰ)の段階にいたって、土器の器形ないしはその組合せがかなり大規模に変化することである。安行式の伝統であったいわゆる紐線文系の深鉢形土器は姿を消すし、飾られるべき形態の土器に磨消縄文をもたない土器があらわれる。そうした器形の変化は次の段階にいたってなお徹底する。鈴木氏等の指摘をまつまでもなく、大形の浅鉢形土器を主体とする杉田C類が、多少の粗製土器を伴うにしても、一型式として存在するかどうかは、われわれの最も気がかりだったことであって、その点はいまなお(天神前遺跡での新しい経験を経たいまも)分析しきれない不安が残っている。しかし土器の形態論的な変化が、型式論的な変化の枠をこえておこることはあり得る。そのような時に生活の変化が考えられるとすれば、まさに晩期の後半という時期はその一つの時点を示している。われわれは土器の研究にあたって、どんな形態の土器がなければある生活はなり立たないというような思考の方法も十分に受け入れるが、単純な現象として理解できた事実が何かを意味しないだろうかという考え方も同時に重視する。それゆえに、関東地方の縄文晩期の後半をむかえる時期の前後に、生活の質的な変化を示す土器の形態上の変化があったとすれば、それは重要な意義があるものとしてとりあげるのである。

晩期の前半と後半の様相のちがいに關する組織的な検討は、われわれの間ではいまようやく手についたばかりであるが、天神前遺跡の土器によって、改めて関東地方の晩期縄文式土器のなかにみられる一つの変化を指摘できたことは幸いであつた。

いわゆる亀ヶ岡系土器の問題

杉田・桂台遺跡のわれわれの研究に対する批判の一つに、亀ヶ岡系各型式土器との対比を重視し、それによって編年を作ることのみに専念する研究の方法と態度は、三〇年くらい時代遅れだという意見があつた。編年それ自体が目的である研究態度はすでに大部分の研究者の、少なくとも意識のなかでは止揚されている。しかし一方では編年を組み立てるべき様々な観方が、たとえ晩期の前半と後半という質的な段階の差としてとらえようという仮説の方向に発展しつつあることは前述の通りであるし、その中にふくまれる亀ヶ岡系の土器との対比が、東北と関東あるいは全

日本のな同様の問題をとらえるめやすになることも事実であろう。そればかりでなく、ここ三〇年来、関東地方の晩期縄文式土器の中に現実にふくまれている亀ヶ岡系遺物のもつ意義はなんら解明されていないし、その基礎となる実地的なあり方を究明する方向も積極的ではなかった。だとすれば関東地方にある亀ヶ岡系土器のもつ意味は、それが実際に存在する限り軽視すべきではない。

ところで不幸なことに、天神前遺跡の亀ヶ岡系土器前半の型式に相当する資料は、質量ともになんら積極的な発言を許されない。ただ後半の型式にくらべて、出土量が極端に少ないという相対的關係において大きな意味があるだけである。その点については、晩期の前半と後半の相違を具体的に示す材料として前項にも触れた通りである。

天神前ⅢとⅣの關係、いいかえれば前浦式と大洞C2式との關係についてのわれわれの考えはその後大きく進展していない。むしろ天神前遺跡の資料によって、杉田・桂台遺跡での見解に、さらに一つの事実を積み重ねることができたと理解している。それらの土器を集中的に分析できる材料を一日も早く得たいものと願っている。その意味で、たとえば埼玉県奈良瀬戸遺跡などの資料の研究は期待されよう。

最後に天神前Ⅵの摘出は、この遺跡が同時にすぐれた弥生初期の遺跡であるという点で、関東地方における縄文式土器の終末から、弥生式土器の発生を具体的に論ずることができる貴重な資料であろう。この問題は天神前遺跡の本報告書等で十分に論じたいと考える。

以上、天神前遺跡で発掘した晩期縄文式土器を紹介することを目的としたこの小報で、必要以上の見解を書き加えたのは、われわれが今後に予定するいくつかの資料の検討にそなえて、その問題点をわれわれ自身確認しておくためであった。そのため仮説とともにそうしたわれわれの試みが、われわれの仕事にいままでにあたえられた批判に、ある程度応えられたものであるならば、望外の喜びとするところである。

(昭三九・七・二〇)

主要参照文献

- 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚」古代36（一九六一）
- 鈴木公雄「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文式土器について」史学36の1（一九六三）
- 鈴木公雄「書評」神奈川県杉田および桂台遺跡の研究Ⅱ「あるかいあ二号」（一九六三）
- 坂詰秀一「埼玉県石神出土の晩期縄文土器」富士国立公園博物館研究報告10（一九六三）
- 麻生 優・川崎義雄「東京都上目黒東山遺跡の晩期縄文土器」古代学研究37（一九六四）
- 鈴木公雄「姥山Ⅱ式に関する二・三の問題」史学37の1（一九六四）
- 杉原荘介・戸沢充則「神奈川県杉田および桂台遺跡の研究」考古学集刊2の1（一九六三）